



‘Student Centered’ という理念を生かした授業の組み立て

— Presentation —

横浜市緑が丘中学校

岸 章浩

はじめに

私は日本の中学校での英語教育に10年以上携わっている。なぜ日本人は中学の時から英語学習を継続してきているにもかかわらず、英語を話すのが苦手と言われてしまうのだろうか。私は常にその問題を解決する方法を模索し続けてきた。

初めは文法事項を教えることが中心で、教科書の訳読式の授業展開に問題があるのではないかと考えられた。その反省からオーラル中心で話すことや聞くことに重点を置いた授業展開やインタビュー、ゲームなど、コミュニケーションアクティビティと言われる対話中心の授業展開が数多く研究され取り入れられるようになり、それはそれで効果が出ていると思う。

しかしそれで問題は解決したかということでもなく、何かもっと根本的な部分について改善が必要なのではないかと感じていた。そんな折、文部省のREX事業(Regional Educational Exchange Program)による派遣で、1997年8月1日より1999年7月31日までニューヨークにあるUnited Nations International School(通称UNIS、国連国際学校)で日本語科教員として、アメリカで実際に生活をし、教育の現場に立つという経験を持つことができた。

UNISはニューヨーク市教育委員会に属する公立学校ではなく、私立のインターナショナルスクールである。私はここで担任こそ持たなかったが、定例の職員会議や研修会への出席、避難訓練や遠足など各種行事での生徒の引率、評価評定の算出、あるいは保護者懇談会や面談を執りおこなうなど、正規の教員として2年間を過ごした。この経験を通して今までの自分の考えを180度転換するような教育観を掴むことになった。すなわち「学びの主体は生徒である(Student Centered)」という理念である。

「学びの主体は生徒である」ということは、学習者自身が課題を解決するために目標を持ち、それを達成するための過程の活動が学習である、という考え方である。そしてそれは学習者自身の個性にあったものでなくてはならないし、学習者はその方法を選択する意志を持っている。つまり生徒が自分で勉強したいことを決めて取り組むことができるように、教師が視点を変えていくべきなのだと考えた。

たとえばTESL(Teaching English as a Second Language)の授業では、まだ日常の会話すらおぼつかない生徒であっても、テキストまるまる一冊を読んできて内容をまとめて発表し、またそのストーリーの結末を自分なりにどう変えるか創作して発表していた。その生徒にとっては文法事項も必要だったろうし、訳読も必要であったかもしれないが、授業で彼に与えられた課題はそのテキストを自分でどう解釈したかであり、それを自分でどのように調べ、表現したのが学習であった。アメリカの教育現場では全ての教科で、自分で課題を見つけ、その解決のためにリサーチし、プレゼンテーションするという流れが実に徹底していた。

帰国後、私はこの指導法を日々の授業で自分なりに考えて実践してきている。

自己表現活動 Presentation

「学習の主体は生徒である。」この理念に基づいて私がたてた指導テーマは「自己表現」であり、その具現化した活動が発表(Presentation)になる。

新横浜プランの中の「学び方の基礎基本」にある、「掴み、使い、広げる」のサイクルは普遍的なものである。生徒はこのサイクルを繰り返して自分の考えを表現できるように成長していくのである。私の授業では提示された言語材

料に対し生徒自身が課題解決のための目標を決め、それを探求し表現できることを目指している。具体的にはText Reading, Skit Making, Essay Writing, Speechの活動を通しておこなっている。

自分の言葉としての音読 Text Reading

教科書を音読することは非常に有効な学習方法であるが、一斉授業の中では一人ひとりの読む力をはかることは難しい。私の授業では生徒が自分で目標を決めて音読練習に取り組む。まず始めに文意の塊(chunk)を教え、発音や抑揚はモデル音声を自分で聞こえた通りに真似る(mimic)ように指示する。するとある生徒は読めるスピードや量を、またある生徒は内容をいかに巧く伝えるかを課題にして練習している。発表は自分がどのように学習したのかを表現するチャンスになる。例えば、NEW CROWN, 3年のLESSON 1ではマジックをクラスで披露するといった内容なので、実際に棒から吊した3枚の五円玉を動かすマジックや紙にとめたクリップのマジックを演じて、登場してくる名前も実際の級友に呼びかけたり、LET'S TALKのようなダイアログのページではグループを作って役柄を分担し、スキットを演じているような工夫が多く見られた。また過去においても長編の物語教材をピクチャーカードを利用し紙芝居にするなど、生徒が独自に教科書を音読するという活動にいろいろなアレンジを加えておこなっている。

自分で想像する力、表現する力 Skit Making

想像力のないところに自己表現はあり得ない。生徒に何かを表現させようとするなら、まず一番始めに自分が何を言おうとしているのかを考えさせることから始めなくてはならない。しかし生徒がいきなり英語で考えることは難しいので、初期の段階としてはグループプロジェクトとして学習した言語材料を使って、短いダイアログのショートストーリーやスキット創作をやらせるとよい。LET'S TALKにあるダイアログを土台にして面白いシチュエーションを自分達で設定して、自分の考えやグループで相談して考えたことを表現させたり、また中学生が飛びつきやすいものとしては、2コママン

ガなどのストーリー創作(3ページの紙芝居を参照)もよい。マンガなら面白い話を作りやすいし興味も湧く。完成したストーリーやスキットは、そのグループで役柄を分担して実演発表の題材になる。スキットの発表では自分に与えられたせりふを繰り返し練習し暗記する。そして仲間との対話を通し役柄に入り込むことで、そのセリフが自分の言葉になり、表現が口に染み込んでいくという効果を期待している。そして今までに実施した小さいスキットの積み重ねを最後に英語劇という形で集大成できればよいと考えている。

英文の論理形式の指導(Brainstorming)

Essay Writing, Speech

表現力を高める個人プロジェクトとして、「環境、人権福祉、国際平和」というテーマでエッセーに取り組ませている。

大きいテーマで内容のある事柄について自分の言葉で自分の考えを表現することは生徒にとっては極めて難しい課題である。特に生徒は日本語で考えたものを英語に転換することになるから、日本語の論理方法と英語の論理方法の違いをよくかみ砕いて理解させる必要がある。すなわち具体的にいえば、英語では何を言いたいのか(Point), 何故そのように言えるのか(Reason), 具体例(Example), 論証(Demonstration), 結論(Conclusion)の流れになる。日本語の「起承転結」は全く通用しない。特に話題が転換することでふくらみを持つ日本語をそのまま英語に直そうとすればするほど混乱を招く結果となる。へりくだった言い方や遠回しな表現は全然理解されない。ポイントを強調して明確な理由をもとに具体例を示さなければ容易に納得させることはできない。この考え方が英語で自己表現をする上で最も重要である。

例えば「夏休みのこと」を生徒に書かせるようなとき、日本語の作文では、「～へ行った。～をした。そして～だった。」のような時系列に出来事を書き連ねて最後に感想をまとめることが多い。しかしこれを英語で読むと結論に至るまでの間に長々と文を読まねばならなくなり、何を言いたいのかがぼやけてしまう。英語ではまず「私は～という印象を待った。」ある

いは「～と考えた。」と書き出して、「なぜならば、～」と理由を述べ、一つの出来事を追求して述べていくような文章構成をする。(4ページの作品を参照)

私はエッセーの活動でこの考え方をわかりやすく説明し、テーマに添って常に「自分の言いたいことは何か」を頭の中で自問自答(Brainstorming)して整理させ、まわりくどい表現はできるだけ避けることを指導して作文させている。黒板や紙に箇条書きにすることで生徒は文章構成がしやすくなる。ずいぶん時間と手間のかかる指導だったが、何人もの生徒がその考えを理解し素晴らしい作品を作り出している。もちろん彼らの言いたいことが即彼らの手の届くような表現ではない場合が多いが、可能な限りそういった表現も紹介し使わせるようにしている。

次に完成した作品を繰り返し読み練習し暗記して最後は発表(Speech)となる。

発表へのステップアップのために

人前にでて発表することは自己表現の有効な手段である。特に語学学習では音読にしるスキットのセリフやスピーチの原稿を暗記するにしる、自分の口で実際に声を出すことになるので、発表を終えた後の効果が大きい。生徒が達成感を抱き、それが自信に繋がる。そして次はもう少し工夫してみようといったステップアップへの新たな動機付けにもなる。

実際私の授業ではこの発表活動を継続してきて、多くの生徒が英語を話すことに自信を持つようになってきた。また英語を読むレベル自体もあがってきている。

とはいえ生徒の中にはまだまだ人前にでて発表することに抵抗感を持つものも少なからずいる。意欲の高まりは感じられるのに他人の目を意識すると自己表現できないものも多い。私の授業ではいつでも生徒が気楽な雰囲気で行言できるように発言ポイントカードを付けさせている。ルールは私から投げ掛けられた質問に対して、または音読練習で、拳手したり指名されなくてもとにかく発言発声した事柄に対してポイントを付加していく。採点は生徒の自己申告である。声が小さい場合には近付いて行って聞



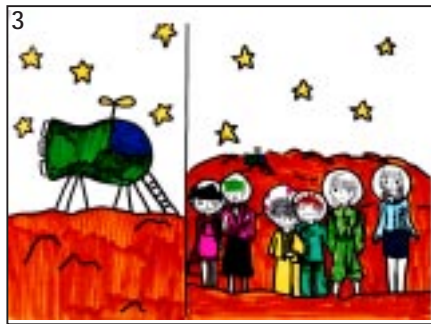
ストーリー創作の作品例

“ Let's go Mars ”

(原文のまま掲載しています)



There was a big explosion.
Yoshio : The Survivals were only six.
Anna : Tell me what to do from now.
Zomahon : A hot spring is in the planet Mars.
Kishi : Really?
Aya : Yes,
Yamachaki : There is a sauna, isn't there?
Everyone : Let's go to planet Mars,



Spaceship arrived in the planet Mars.
Zomahon : Will you lend me a towel?
Aya : Okay.
They looked for hot springs, But there were no hot springs at all.
Anna : What shall I do?
Kishi : Unbelievable.
Yamachaki : Zomahon is a liar.
They felt uneasy.



There was a boy near by.
Yoshio : What're you doing?
Mogura : I'm looking for hot springs.
Yamachaki : What's your name?
Mogura : My name is Mogura.
They helped Mogura with digging a hole.



At last, hot water sprang out of the hole.
Anna : Wonderfulo.
Zomahon : I am very glad. It's great.
Later, it became the health land.

き耳を立ててやり評価する。生徒にとって他人は関係なく発言発声したことでも、「自分が答えられた、自分が読めた」という達成感が自信になり、次第に「次はみんなに聞こえるように」そして「次は発表しよう」という動機に結びついていく。ポイントは毎時間毎に承認してステッカーをカードに貼付している。自己申告だからといって不正をするようなケースは今まで一切ない。

また教科書の内容を学習する際、生徒一人ひとり順番に受け持ったページの新出語句から内容説明までを予習して発表させるようにしている。この場合は必ず人前で発表しなければならないが、内容は簡単な事柄の発表なので一つの通過点になっている。いずれの場合も生徒自身が臆せず授業に参加し発言したという達成感を抱かせることで、次の課題に対しての自信と意欲を高める土台になっている。発表の授業では発表しなかった生徒にも他の発表を真剣に評価する活動を通して、自分の課題を探り自分も発表をしようという向上心を育てるように働きかけている。また人の技能や感性と自分のそれとを比較することで自分の活動を自己評価することを望んでいる。

発言ポイントカード

まとめ

英語の授業では生徒は教室の座席にただ座って勉強するんじゃないんだ、頭や体を動かし自分の言いたいことと表現するんだ、といったイメージを作るように、発表活動を重視し、教師が全てを指示するのではなく、課題を作ったり、

アドバイスをしたりする黒子役に徹し、「生徒が主役」という授業を展開してきている。私の英語の授業のイメージは、体育の授業で練習の課題を聞いた後、生徒が各自で練習に励み、発表する実技教科なのである。アクティビティを通して生徒が自分で考え表現することを引き出そうとしているのである。そして、こう言いたい、ああ言いたい時はどんな表現になるのか知りたいというモチベーションが高まるのを期待している。

私が生徒のモチベーションが高まるような課題を作り、生徒が自分で言いたいこと、やりたいことをみつけ（課題に対する目標の設定）、自分で調べて(Research)、練習して(Practice)、人に話す(Presentation)。その流れを私の指導理念の柱にして今後も続けていきたい。それがすなわち「生きる力の教育」に繋がるのではないかと考えている。

作文「夏休みのこと」 生徒の作品例

Class _____ Name _____

My summer vacation was nice. Because I went to the nursery to volunteer for three days. I had a very happy time there. (First day) It was raining. So children and I played inside. They were very cute and energetic.

I made a crane, a flower, and a bird with paper.

(Next day) We played outside. They looked ^{happy} fun. I was ^{too} fun.

Some children said, "Like you". I was glad to hear that.

Final day, one child cried when I said, "Good bye".

I was sad too. I promised "Come here again".

At that time, I thought I wanna be a nurse too much.

三省堂英語教育・中学 別冊

2002年10月15日発行

編集・発行人 渡辺孝映

発行所 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14

電話 03(3230)9421

電子メール newcrown@sanseido-publ.co.jp

ホームページ <http://www.sanseido-publ.co.jp/>